

ソフトバンクグループ CSRレポート2014



社長メッセージ



情報革命で人々を幸せに

ソフトバンクグループ 代表

孫 正義

ソフトバンクグループでは、「情報革命で人々を幸せに」という経営理念の下、人類と社会への貢献を続けてまいりました。

人類20万年の歴史において、農業革命、産業革命、情報革命という大きな3つの革命がありました。その中でも情報革命は非常に大きな革命です。これからも続いていくであろうこの大きな革命の中で挑戦し続けるとともに、事業を通じて世界中の人々と社会に貢献していく企業グループであり続けたいと思っています。

私たちは「ソフトバンクグループCSR基本方針」を掲げ、「健全なインターネット社会」、「夢と志を持つ次世代」、「地球の未来」、「復興支援」というテーマで活動し、お客さまや株主、取引先の皆さま、従業員を含めた全てのステークホルダーの皆さまの信頼基盤を築いてまいりました。

また、一人でも多くの人の喜びを増やし、悲しみを減らしたい。人と人をつなぎ、世界中の一人でも多くの人に、笑顔とかけがえのない幸せを届けていきたい、と常に考え、高い志を持って行動してきました。

そんな私たちにとって、情報革命を通じて革新的なサービスを生み出し、人々のライフスタイルをより豊かで楽しいものに変え、世界中の皆さまと共に発展し続けることは、使命であり、喜びです。これが、ソフトバンクグループが掲げる志の原点です。

今後も「挑戦と進化」を続け、日々の事業活動を通じて、ソフトバンクグループだからこそ担える社会課題の解決に取り組んでまいりたいと思います。

Contents

02 社長メッセージ

03 ソフトバンクグループについて
ソフトバンクグループCSR基本方針

04 みんなで協力できる社会を

04 日本初の募金プラットフォーム

「かざして募金」

ソフトバンクモバイルは、2014年3月に日本初の募金プラットフォーム「かざして募金」の提供を開始しました。

*「かざして募金」アプリをダウンロードし、このCSRレポートの表紙(全体)または4~5ページにかざしていただくと、国内外で活動しているさまざまな非営利団体に継続寄付ができます

06 復興支援

06 チャリティホワイト

東北の子どもたちへ、継続的な支援を!

ソフトバンクグループは、東北の子どもたちへの継続的な支援を目指し、2011年8月からオプションサービス「チャリティホワイト」の提供を開始しています。

09 ツール・ド・東北

自転車で被災地の「いま」を感じ、震災の記憶を未来に残す

ヤフーは、東日本大震災からの復興支援の一環として、サイクリングイベントを2013年度から開催しています。

11 いつも安心・安全を

12 夢と志を育む

14 環境

16 災害対策

16 ソフトバンクグループの災害対策

17 多様なニーズ

20 Topics

22 ソフトバンクグループのCSR活動
2013年度実績と2014年度予定

【報告期間】2013年4月~2014年3月
【報告範囲】ソフトバンクグループ(国内連結子会社)

ソフトバンクグループについて

ソフトバンクグループは、事業領域である「情報産業」において、時代に必要とされる最先端のテクノロジーと最も優れたビジネスモデルにより、情報革命を推進していきます。

社名	ソフトバンク株式会社 SoftBank Corp.
設立年月日	1981年9月3日
本社所在地	〒105-7303 東京都港区東新橋1-9-1
代表者	代表取締役社長 孫 正義
資本金	2,387億72百万円
子会社数	756社(うち海外616社)
関連会社数	105社(うち海外60社)
従業員数	185人(連結ベース70,336人) 2014年3月末現在

ソフトバンクグループの事業領域と主なグループ企業
(2013年度)

移動通信事業

ソフトバンクモバイル株式会社

イー・アクセス株式会社

株式会社ウィルコム

Wireless City Planning株式会社

Brightstar Corp.

ガンホー・オンライン・エンターテイメント株式会社

Supercell Oy

スプリント事業

Sprint Corporation

固定通信事業

ソフトバンクテレコム株式会社

ソフトバンクBB株式会社

インターネット事業

ヤフー株式会社

その他

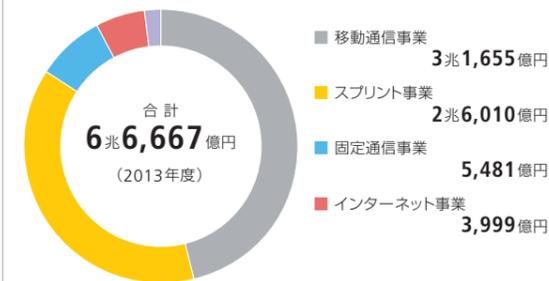
福岡ソフトバンクホークス株式会社

SBエナジー株式会社

Bloom Energy Japan株式会社 など

*2014年6月1日付でイー・アクセスはウィルコムを吸収合併しました。
また同年7月1日付でイー・アクセスは社名をワイモバイルへ変更しました。

ソフトバンクグループの連結売上高構成比



ソフトバンクグループCSR基本方針

ソフトバンクグループは通信事業者として、情報という名のライフラインを守る重要な使命と責任を負っています。この大きな社会的責任を完遂するために、私たちは常にお客さまの「うれしい」から考え始め、成長への果敢な挑戦を通じて株主の皆さまの期待に応えます。また、その挑戦が成長を生む環境を整えて従業員のやりがいと誇りを大切に、相互信頼と革新をベースにしてお取引先との発展を期し、そして健全なインターネット社会の夢と志を、次世代に受け継がせられるような社会への貢献を続けていきます。

私たちは・・・

私たちソフトバンクグループは、「情報革命で人々を幸せに」という経営理念の下、事業を通してステークホルダーの皆さまと共に発展を遂げる企業でありたい。そのために、私たちは、自らにこう問いつづけます。

創っているだろうか

ワクワクする驚きを。わかりやすさと安心を。

みんなの「うれしい」を。

ソフトバンクグループは、

お客さま本位でありつづけます。

進めているだろうか

成長へのあくなき挑戦を。健全で透明な経営を。

公正で適時な情報開示を。

ソフトバンクグループは、

株主の皆さまの期待に応えていきます。

持っているだろうか

チャレンジと成長の場を。個性が生かされる環境を。

頑張りや成果が評価される仕組みを。

ソフトバンクグループは、

従業員のやりがいと誇りを大切にします。

築いているだろうか

相互の信頼を。公正な取引関係を。

革新を生み出すパートナーシップを。

ソフトバンクグループは、

取引先の皆さまと共に発展していきます。

育んでいるだろうか

健全なインターネット社会を。夢と志をもつ次世代を。

地球の未来を。

ソフトバンクグループは、

人々が幸せになる**社会**作りに貢献します。

ソフトバンクグループは

あすのインターネット社会にむけて、志高く事業に取り組んでまいります。

みんなで協力できる社会を 日本初*1の募金プラットフォーム「かざして募金」

動画サイトはこちら → 

「2020年に日本社会で寄付10兆円時代を実現する」というビジョンを掲げる、特定非営利活動法人「日本ファンドレイジング協会」の代表理事 鶴尾雅隆氏をお招きし、ソフトバンクモバイルが2014年3月にリリースした募金プラットフォーム「かざして募金」への評価と、今後の可能性についてお伺いしました。



鶴尾 雅隆 氏

特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会 代表理事
国際協力機構、米国Community Sharesを経て、ファンドレイジング戦略コンサルティング会社、(株)ファンドレックスを創業。日本ファンドレイジング協会の創設に携わる。米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学非営利組織経営管理修士、インディアナ大学The Fundraising School修了。寄付10兆円時代の実現に向けて、NPO・公益法人のコンサルティング、研修、講演などを行い、全国各地を奔走中。著書に「ファンドレイジングが社会を変える」など。



池田 昌人

ソフトバンクモバイル
CSR企画部 部長

寄付文化の新しいステージを切り拓いた「かざして募金」

池田 日本のファンドレイジング(資金集め)の現状と課題についてお聞かせください。

鶴尾 東日本大震災以降、社会のために役立ちたいと思う人が増えています。内閣府が2012年に行った調査*でも、76.9%の人がこれまでに寄付をしたことがあると回答しています。また、非営利団体への関心度を震災前後で比較すると、震災後は「とても関心がある」、「多少関心がある」が50%を超えています。しかし、「何かしたい」と思ってもチャンスがない。募金箱に寄付するだけでは達成感がないし、銀行振り込みは面倒くさいといった声が聞かれます。そこで、今はより親しみやすく、楽しく寄付できる仕組みが求められていると思います。

また、震災以降、非営利団体も「良い活動をしていれば世の中の支援はついてくる」という意識から、「多くの人や物、組織を巻き込み、一緒に物事を解決していく方が大きな支援につながる」と思い始めてきています。

池田 確かに、弊社も多くの方と共に東北の子どもたちを長期的に支援する「チャリティホワイト」を立ち上げたのは震災以降です。その後も、「より多くの方に参加していただけるプラットフォームとは何か?」と検討を続け、その結果生まれたのが「かざして募金」でした。「寄付文化の革新」を標榜されている団体として、「かざして募金」をどのように評価されていますか?

鶴尾 「かざして募金」は、スマートフォンアプリの画像認識機能を使って楽しく社会貢献ができ、また、「寄付をしたい人」と「寄付を必要とする非営利団体」とをつなぐパイプラインとして、今までどの国にもなかった先進的な仕組みである、という評価をしています。参加する非営利団体が事前登録した文字や画像、その他クリエイティブなどをスマートフォンアプリが認識し、各団体の寄付サイトにアクセスして寄付ができるサービス、というのは日本初*1だと思います。そういう点からも、「かざして募金」は、「チャリティホワイト」に続き日本の寄付文化における新しいステージを切り拓いたと言えます。

池田 ありがとうございます。弊社としても、モバイルの新しい可能性が見えてきたという実感を持っています。今まで接点の少なかった業界や教育機関からも、寄付という枠組みにとどまらないお話をいくつかいただいています。

非営利団体とユーザーが連携し、課題解決のきっかけになり得る

池田 この「かざして募金」に対して、どのようなことを期待されていますか?

鶴尾 例えば、ある非営利団体に繰り返し寄付をしていると、その非営利団体からメッセージが届くような仕組みがあるといいですね。メッセージの中に、感謝のコメントや感動できるエピソードが添えられていると、寄付した人もポジティブな気持ちになり、生活に張りが出てくると思うのです。「かざして募金」をきっかけにして、多くのスマートフォンユーザーが“My応援NPO”を持ち、

「私はこういう人たちを応援しているのですよ」という方が一人でも多く増えることを期待しています。

池田 非営利団体との連携という点では、地域社会固有の課題解決につながるような活用方法も構想しています。例えば、都市部の子どもたちを対象に自然と触れ合う体験プログラムを提供している非営利団体に、「かざして募金」を利用している人々が参加して、一緒に活動できるような仕組みを立案していきたいです。

鶴尾 それは良いアイデアですね。教育の問題や少子高齢化など、今の日本は課題先進国ですが、これらの課題は既存の枠組みの中だけでは解決しません。また、公的機関や企業、非営利団体が単体で解決できるものでもありません。課題解決には、それぞれのプレーヤーが既存の枠を越えて、今までになかったイノベーションを起こしていく必要があります。そういう意味で、「かざして募金」のようなスマートフォンアプリを使った新しい寄付プラットフォームはとてもユニークであり、社会の課題解決のきっかけになり得ると思っています。アプリの活用方法は工夫次第でいくらでもあると思うので、今後の活用が楽しみです。

* 平成23年度特定非営利活動法人の実態及び認定特定非営利活動法人制度の利用状況に関する調査



みんなで協力できる社会を

アプリダウンロードはこちらから



「かざして募金」とは

ソフトバンクモバイルは、携帯電話の利用料金の支払いと一緒に寄付ができる「かざして募金」の提供を開始しました。専用の無料アプリをインストールしたスマートフォンを、対象となるポスターやチラシなどの画像にかざすだけで継続的に寄付ができます。*2これは、社会貢献活動の一環として移動通信事業者が提供する日本初*1の募金プラットフォームです。

現在、非営利団体の多くが、持続可能な活動を行うための課題として「資金調達」を挙げています。ソフトバンクモバイルでは、非営利団体を継続的に支援するため、このプラットフォームを展開するとともに、お客さま自身が支援したい団体を選んで寄付することで、一人

人が社会に貢献できる仕組みを提供していきます。

なお、「かざして募金」に参加している非営利団体のウェブサイトからも寄付ができ、携帯電話の利用料金と一緒に支払うことができます。*3

*1 日本ファンドレイジング協会調べ(2014年3月5日現在)

*2 「毎月継続寄付」のチェックを外すと、一回限りの寄付もできます

*3 ソフトバンクのスマートフォン以外からは、クレジットカードでのお支払いとなります



ポスターやチラシなどにかざすだけのシンプル操作



携帯電話利用料と一緒に支払い*4

*4 ソフトバンクのスマートフォン以外からは、クレジットカードでのお支払いとなるため、クレジットカード番号などの入力が必要です。寄付金の領収書発行はできません

詳しい情報はこちら



「かざして募金」アプリをダウンロードし、このページの枠(C)内またはこのCSRレポートの表紙(全体)にかざすと、国内外で活動しているさまざまな非営利団体に継続寄付ができます。

復興支援

チャリティホワイト

動画サイトはこちら →

東北の子どもたちへ、継続的な支援を!



チャリティ
ホワイト

これまでの寄付完了額は **6億1450万454円** となりました。
(2014年7月25日現在)

お客さまと共に東北の子どもたちへ継続的な支援を行うため、2011年8月1日から提供されている、オプションサービス「チャリティホワイト」。今回はチャリティホワイトの寄付金により実施されている「赤い羽根チャリティホワイトプロジェクト」*が助成する特定非営利活動法人「トイボックス」の代表理事 白井智子氏に、「みなみそうまらーニングセンター」の活動内容と今後の展望についてお伺いしました。

*被災地で地域に根差して活動する特定の団体を支えることで、夢と志を持った子どもたちの育成を目指すプログラム



白井 智子 氏

特定非営利活動法人トイボックス
代表理事
スマイルファクトリー校長

2003年日本で初めて不登校の子どものための公設民営のスクールおよび相談機関を設立。東日本大震災後、南相馬の発達障がいの子どものサポートする「みなみそうまらーニングセンター～ふみだす未来の教室～」を開設。内閣府「新しい公共」推進会議委員、文部科学省中央教育審議会青少年の体験活動の推進の在り方に関する部会委員などを務める。

トイボックス

トイボックスは、発達障がいや不登校の子どもの支援、ダウン症児者へのダンスを通じた自立支援、まちづくりなどを通じ、多くの領域のプロフェッショナルが連携して子どもと親が元気でいられる社会をつくることをめざすNPOです。

「チャリティホワイト」の支援によってセンターを新設し、受け入れ対象年齢を拡大

福島県南相馬市にある「みなみそうまらーニングセンター～ふみだす未来の教室～」は、被災地で困難な状況に置かれている発達障がいの子どもの心身のケアを必要としている子どもたちの学習支援・心理ケアを行うことを目的として設立された施設です。2012年1月の開設以来、たくさんの子どもたちが一緒に学び、一緒に過ごしながら、各々に合った学習方法やコミュニケーションのトレーニングを行ってきました。

小学生のみを対象に10人でスタートした施設には、現在22人の子どもたちが通っています。開設して2年が経つと、卒業を間

近に控えて施設を去らなければならない子どももできます。子どもたちは「中学生になってもここに通いたい」「ようやく見つけた自分の居場所を失いたくない」と訴えるようになりました。しかし、センターの規模や資金、受け入れ体制などに課題があり、子どもたちの要望に応えられない状況が続いていました。

そんな折、私たちのセンターが「赤い羽根チャリティホワイトプロジェクト」の第1号助成先として決定したという旨の連絡を選出委員会からいただきました。この助成のおかげで、2014年5月に新しいセンターを作ることが決定し、小学生に加え、中学生と幼児も受け入れができるようになりました。

いかにして、この支援活動を継続していくか

東北の子どもたちの支援という、「チャリティホワイト」の趣旨に賛同される方が多くいらっしゃることは、間違いなく被災者の皆さまの励みになっています。また、「チャリティホワイト」は継続的に支援を行う仕組みなので、長期的に被災地支援活動に取り組もうとしている私たちとしては、非常に感謝しています

し、だからこそ大切に利用させていただかなければ、と常に思っています。

現時点での課題は、今取り組んでいる活動をいかに継続していくかということです。私たちが活動してきたこの2年間の成果としては、子どもたちの様子が落ち着いてきて、各々が相手のことを考えて行動できるようになってきたことが挙げられます。学校での成績も向上し、それが子どもたちの自信にもなっています。しかし、子どもたちを取り巻く環境は、依然として困難な状況にあります。だからこそ、継続的な支援が必要なのです。

もう一つの課題は、次世代を担う人材の育成です。これまで支える側だった人たちの多くが震災で避難してしまい、現在は支援を必要としている人たちの割合がとても高い逆ピラミッドの状況です。先日らーニングセンターの子どもたちが「ここで頑張っていて勉強して、将来はこのスタッフになりたい」と言ってくれました。こういった子どもたちのためにも、私たちは長期的な活動を通じて、次世代を担う人材を地道に育てていきたいと思っています。

「チャリティホワイト」とは

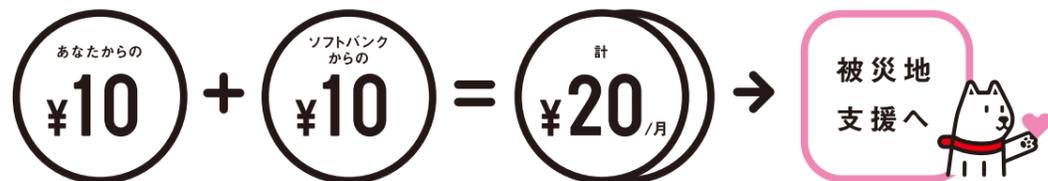
「チャリティホワイト」は、お客さまとソフトバンクグループで東北の子どもたちを継続的に支援する取り組みです。毎月の基本使用料にプラス10円を寄付いただき、ソフトバンクグループも同額を拠出することで、合計20円を毎月寄付しています。2011年8月1日のサービス開始以来、延べ寄付回数は3090万回、寄付総額は6億1450万454円となりました。*

また、チャリティホワイト特設サイトでは、東日本大震災で被災した地域の復興状況や現在の様子などを「ふみだす未来の教室」などのコーナーで定期的に情報発信しています。

今後もお客さまと共に、継続的に被災地の子どもたちの支援を続けてまいります。

* 2014年7月25日現在

「チャリティホワイト」は、毎月の基本使用料にプラス10円を寄付いただき、ソフトバンクからの10円も加えた計20円を被災地の子どもたちを支援する団体に寄付するオプションプランです。



詳しい情報は



赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」の一環として、「住民支え合い活動助成」事業を開始

共同募金会は2013年4月から、助成を通じて地元の人たちによる復興を後押しすることを目的に、1件当たり10万円を上限として「住民支え合い活動助成」を実施しています。助成が決まった団体のうち、2013年7月以降に実施する子どもを対象とした活動については、「チャリティホワイト」がその全額を支援しています。

被災地ではこの助成金を活用し、仮設住宅自治会による夏祭りや子どもたち向けのスポーツ大会、クリスマス会などさまざまな活動が行われています。このように「チャリティホワイト」の寄付金は、NPO法人やボランティアグループによる子ども支援活動に加え、被災された地元住民の方々による子ども支援に関する活動にも役立てられています。

宮城県気仙沼市の高井子供会さまからの活動報告

宮城県気仙沼市高井には、震災後県内唯一となった海水浴場

チャリティホワイト報告ページ

があります。しかし、津波の記憶が蘇り、不安で子どもを海で遊ばせることができないなど、今でも海に近づくことができない子どもたちもいるため、志戸平温泉のプールで親子交流会を行うことにしました。子どもたちは初めての「ウォータースライダー」に大興奮。小雨が降っているにもかかわらず、何度も何度も階段を昇り降りしながら楽しみました。普段は忙しくて話をする機会がなかった保護者同士も会話が弾み、地域・親子の絆を強めることができました。震災後、活動が休止してしまっていた子供会でしたが、皆さまからのご支援のおかげで、活動を再開することができました。本当にありがとうございました。



復興支援

動画サイトはこちら → 

復興を支える 被災地の高校生のために




TOMODACHIソフトバンク・リーダーシップ・プログラム

ソフトバンクは、在日米国大使館と米日カウンシルが主導するTOMODACHIイニシアチブの趣旨に賛同し、2012年から東日本大震災の被災地域である岩手、宮城、福島県の高校生約400人を支援しています。米国カリフォルニア大学パークレー校で行われる3週間の集中コースで、参加者は自分たちの地域社会に貢献する方法を探求するとともに、起業家との触れ合い、ボランティア活動、ホームステイ、アメリカの高校生との交流を通じ、異文化に触れる中で、自分が目指す目標と、それを叶える方法を考える機会を持ちます。

当社代表取締役社長の孫正義は、16歳のときに渡米し、新しい文化やライフスタイルに触れたことで自分の人生は大きく変わったと感じています。孫の母校であるカリフォルニア大学パークレー校で行われるこのプログラムが、多くの高校生にとって夢をつかむための最初の一歩になることを願っています。

帰国後の高校生の取り組み

2013年11月、2013年に同プログラムに参加した高校生約100人が仙台に再集結し、3週間にわたる集中コースでの学びを地域の復興にどのように生かしていくかについて発表しました。セミナーに



は、NPOや企業の方々、被災地で活躍する専門家など約20人が審査員として参加しました。



発表した高校生の中には、「風評被害に苦しむ農家や漁師を助けた」と、地元ベンチャー企業と一緒に、インターネット通販を利用した地元特産品の販売を検討しているチームや、「小学校のグラウンドや公園に仮設住宅が建ち並び、遊び場を失った子どもたちを救いたい」と地元の子どもたちを集め、地域に昔から伝わるタグラグビーを用いた遊び場の支援を計画しているチームなどさまざまでした。審査員のアドバイスを受けて、高校生たちが米国研修での学びから考え出した復興へのアクションが、実現に向けて動き出しています。

また、2012年に参加した高校生の、「震災後、観光客が激減した福島県いわき市を盛り上げたい」という強い想いをかたちにするため、高校生自ら観光バスツアーを企画・実施するプロジェクト「TOMOTRA」を株式会社エイチ・アイ・エスと協力することで実現。これまでに188人*のお客さまがバスツアーに参加してくださいました。* 2014年6月25日現在

[詳しい情報はこちら](#)


復興支援

ツール・ド・東北

自転車で被災地の「いま」を感じ、 震災の記憶を未来に残す



宮坂 学

ヤフー株式会社
代表取締役社長・CEO

写真: 水上俊介
(mizukami shunsuke)

「ツール・ド・東北」を立ち上げたきっかけ

情報技術で人々や社会の課題を解決する「課題解決エンジン」であるYahoo! JAPANにとって、東日本大震災に関する一番の課題は、やはり東北の復興だと考えています。そのため、まず東北の生産者と全国各地をつなげる「復興デパートメント」(10ページ参照)を立ち上げ、その後、宮城県石巻市に「ヤフー石巻復興ベース」を開設しました。次は全国各地から被災地に人をたくさん呼びたいと考えていたときに、河北新報社の一力社長とお会いする

「ツール・ド・東北」開催概要



第1回「ツール・ド・東北 2013 in 宮城・三陸」は、2013年11月3日に宮城県の三陸沿岸エリアを舞台に開催されました。受付開始後14分で参加申し込みが定員に達するほど盛況で、総勢1,316人の参加者が東北を駆け抜けました。第2回は2014年9月14日に開催する予定で、募集人員を増やすと



ともに、コース・距離なども拡充します。なお、この大会の事業収益は、自転車を活用した東北地方の観光振興や、サイクリングロード整備などへの助成に充てられます。

[詳しい情報はこちら](#)


機会に恵まれました。河北新報社は、第二次世界大戦後に復興の一環として東北一周の自転車ロードレースを開催。1993年から2008年までの15年間は「ツール・ド・とうほく」というステージレースを開催していました。一力社長と話をするうちに意気投合し、震災復興のために、「ツール・ド・東北」として復活させることを決めました。

自分の足でペダルを漕いで東北の復興を感じ取る

2013年11月3日、第1回「ツール・ド・東北 2013 in 宮城・三陸」の大会当日、私は一般参加者にまじって60kmのコースを走りました。沿道の応援が予想以上に多くて感激しました。全国各地から集まった参加者やボランティアの皆さまが、地元へ帰って「ツール・ド・東北」で見たこと感じたことを話すだけでも、被災地には大きなプラスになると思います。

この大会は今後10年継続し、将来的にはレースの開催も視野に入れながら、世界中から東北の復興に関心のある人たちが集まり、一緒になって楽しめるイベントに成長させていきたいと考えています。

「Search for 3.11」3.11、検索は応援になる。

東日本大震災の記憶の風化防止と被災地の復興支援に貢献するため、2014年3月11日、「Yahoo! 検索」で「3.11」というキーワードを検索すると、検索された方おひとりにつき10円を、Yahoo! JAPANが公益財団

法人東日本大震災復興支援財団に寄付するというキャンペーンを行いました。多くの方々に賛同をいただき、「3.11」と検索された方は、合計2,568,325人(ユニークブラウザ数)となりました。その結果、2014年4月には東日本大震災復興支援財団へ、2568万3250円の寄付を行いました。

「Yahoo! 検索」は、これからも東北を応援していきます。

[詳しい情報はこちら](#)


復興支援

復興支援の輪をひろげよう!

チャリティケータイ

ソフトバンクモバイルは、公益財団法人東日本大震災復興支援財団の「『あの日』を忘れない宣言」の趣旨に賛同し、全国で実施される東



日本大震災の復興支援を目的としたイベントに携帯電話などを無償で貸し出す制度、「チャリティケータイ for 東北～復興支援の輪をひろげよう!～」を実施しています。

東日本大震災から3年以上が経過し、復興支援団体の多くが「寄付金額の減少」を課題に挙げています。そこでイベント運営事務局が復興支援団体に寄付することを条件に、当社がイベント運営時の通信費用を負担します。この制度を活用したチャリティイベントを増やすことで、復興支援団体の課題解決のサポートをしていきます。

詳しい情報はこちら



復興支援

東北の息吹を感じる名産品や生産者の思いを、全国に向けて発信

復興部門

「復興部門」は、東北の本当においしいもの、良いものを、全国の人にお届けするインターネット百貨店です。Yahoo! JAPANが事務局を務め、東北の魅力あふれる商品や生産者の思いを全国のお客様さまにお届けし、生産者と消費者をつなぐと同時に、現地での自立

した事業展開や、東北商品のブランド価値向上に取り組んでいます。自然豊かな地域で育まれた海産物や農産物、歴史が息づく伝統工芸品など、東北には昔から魅力的な商品がたくさんあります。ぜひ一度、「復興部門」をのぞいてみてください。



「復興部門」の仕組み

復興部門ストア	生産者、加工業者、小売業者
復興部門支部	各地域で生産者や商店を取りまとめ、EC運営代行を行うNPO、企業、商工会議所など
復興部門パートナー	各パートナーの強みを生かし、復興部門を支える企業、団体



目指せ世界進出!? 三陸フィッシャーメンズプロジェクト

「三陸フィッシャーメンズプロジェクト」とは、漁師も魚屋も生活者も、魚に関わる人たちがみんながつながり、三陸から新しい水産業を創っていくプロジェクトです。三陸には、磯の香りが漂うムール貝や、肉厚で濃厚な味わいの牡蠣など、新鮮な魚介類が豊富にあります。こうした三陸の豊かな食材や、生産者のこだわり、日々の活動を発信していくことで、東北の水産業に新たな価値やビジネスチャンスを開く活動を行っています。「復興部門」内の特設サイトでは、「顔の見える水産業」「参加できる水産業」を目指し、活動レポートだけでなく、旬の海産物情報やおいしく食べるためのレシピなども掲載しています。

復興部門特設サイト



いつも安心・安全を

動画サイトはこちら →

子ども一人一人に合わせた安全対策を推奨するフィルタリングアプリ



Yahoo! あんしんねっと for SoftBank

近年、スマートフォンやタブレット端末の普及により、インターネットサービスへのアクセス方法が多様化し、ご家庭での安全対策や安全教育の重要性が高まっています。ヤフーとソフトバンクモバイルは、青少年のお客さまに、より安心・安全にスマートフォンをご利用いただけるよう、有害サイトへのアクセスを制限するフィルタリングアプリ「Yahoo! あんしんねっと for SoftBank」を提供しています。このアプリは、小学生、中学生などの学齢別のフィルタリングモードを選ぶだけで簡単に設定でき、膨大なデータと判定技術により、高い精度で有害サイトをブロックします。また、2014年2月から追加された新機能「ネットあんぜん検定」では、インターネットを安全に利用するための子どもの理解度を21問のクイズ形式でチェック。一人一人の理解度に合わせた安全対策をご案内しています。これにより、子ども自身がインターネットの安全な利用や危険性について知識を深め、適切に判断できるようになります。また、保護者の方には、子どもの経験や安全知識に応じた対策を講じるための手助けとなるアプリです。

アプリダウンロードはこちらから



いつも安心・安全を

迷惑電話を自動警告!

迷惑電話チェッカー

ウィルコム(現 ワイモバイル)は、自宅の固定電話に設置するだけで、迷惑電話を自動で警告する「迷惑電話チェッカー」を提供しています。これは全ユーザーが登録した迷惑電話番号情報を共有するので、初めてかかってきた電話番号でも、電話に出る前から迷惑電話と分かり、大変安心です。

迷惑電話番号情報は2014年5月時点で既に2万5千件以上が登録されており、警察組織や自治体からも情報提供を受けています。ウィルコム(現 ワイモバイル)ケータイ向けオプションサービス「モバイル迷惑電話チェッカー」でも同種のサービスが利用可能です。

たくさんのサービスがあるけれど、うちの子に必要な対策って何かしら?

そんな時は「ネットあんぜん検定」をしよう!!

- 全21問
- インターネット利用に関する問題に解答

判定結果に合わせて、お子さまに適した**推奨**対策をご案内します!

- セキュリティサービス
- フィルタリングサービス
- 迷惑メール対策

詳しい情報はこちら

◎リストに登録された番号や、知らない番号からの電話を、着信時にお知らせ。

迷惑番号リストに登録されている番号から電話がかかると...

管理サーバー(提供:トピラスシステムズ) 迷惑電話番号リストを自動更新する

ランプの光や音声で不明・迷惑番号をお知らせ

他ユーザーの拒否情報もリスト共有される

ブロック

発信

ずっとつながらない...

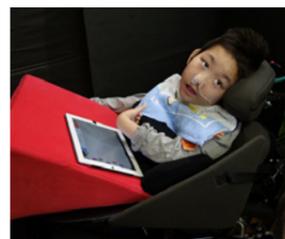
詳しい情報はこちら

夢と志を育む

障がいのある子どものための
モバイル端末活用事例研究

魔法のプロジェクト

ソフトバンクモバイルとエデュアスは、東京大学先端科学技術研究センターと共に、障がい児の社会参加の機会促進を目指し、「障がいのある子どものための携帯情報端末の活用事例研究」に取り組んでいます。これは、他人とうまく言葉のやりとりができない子どもが、携帯情報端末に文字を表示させることで意思疎通を行ったり、視覚的に時間を表示するアプリを使用することで「ちょっと待ってね」という抽象的な時



間の概念への理解をサポートするなど、コミュニケーションや認知の方法として、携帯情報端末の可能性を研究するものです。プロジェクトにご協力いただける特別支援学校に携帯電話やスマートフォン、タブレット端末などの携帯情報端末を一定期間無償で貸し出し、ご活用いただく中で、その具体的な活用事例を研究・公開しています。

これまでのプロジェクトで、延べ153校の特別支援学校にご協力いただきました。そこで蓄積された活用事例を、成果報告会で報告したり、活用事例集を発刊し公開することで、「学習のバリアフリー」に向けた取り組みを促進しています。



これまでの取り組み

2009年度
「あきちゃんの魔法のポケットプロジェクト」
携帯電話を主な対象機種とし、学習や生活支援をテーマにした事例研究

2011年度
「魔法のふでばこプロジェクト」
タブレット端末を対象機種とし、教室での学習を主なテーマにした事例研究

2012年度
「魔法のじゅうたんプロジェクト」
タブレット端末とスマートフォンを対象機種とし、学習や生活支援をテーマにした事例研究



障がいのある子どもたちの社会参加を促進する「魔法のランププロジェクト」(2013年度)

2013年4月からは、これまでのプロジェクトの成果を生かし、携帯情報端末を校内での学習はもとより、例えば眼鏡のようにあらゆる場所で活用し、障がいのある子どもたちの社会参加を促進することをテーマに、「魔法のランププロジェクト」を実施しました。「魔法のランプ」という名称には、携帯情報端末を活用して障がい

のある子どもたちを支援していくことが、子どもたちの未来を照らし出す道しるべになってほしい、という願いが込められています。このプロジェクトでは研究成果を広く知っていただくため、全国8カ所で開催された一般向けのセミナーを開催し、啓発活動を行いました。

携帯情報端末の活用事例について

2013年度の取り組みレポートは、「魔法のプロジェクト」のウェブサイトでご覧いただけます。携帯情報端末が、障がいのある子どもたちの学校での学習や生活の場での活動をどのように支援できるのか、協力校が「魔法のランププロジェクト」を通じて取り組んだ活用事例をまとめています。

● 自身のアレルギーへの理解を深める

知的障がいとアレルギーのある子どもが、記録や情報管理が簡単にできるアプリを使うことで、必要な情報をいつでも参照できるようになりました。また、携帯情報端末のアプリを使いアレルギー食材が含まれていないかを調べてから食べる習慣を身に付けて、自身のアレルギーの状態を意識し、セルフマネジメントを行うことにつながりました。

● 身振り手振りでは伝わらない気持ちを伝える

障がいにより、意思や要求などを言葉で伝えられない子どもが、コミュニケーションアプリ(VOCAや絵カード)を使うことで、身振り手振りでは伝わらない意思や気持ちを伝えることができるようになりました。伝わる楽しさ、満足感を味わう中で、周囲の人とのコミュニケーションが深まりました。

魔法のランププロジェクト成果報告書はこちら



夢と志を育む

障がいのある若者を将来の社会のリーダーへ
養成するプログラム

DO-IT Japan

ソフトバンクモバイルは2007年より、東京大学先端科学技術研究センターが主催する「DO-IT(Diversity, Opportunities, Internetworking and Technology) Japan」を支援しています。これは、コンピューターや各種IT機器などを利用し、全国から選抜された障がいのある若者たちの大学進学や就職を支援することで、将来の社会のリーダーとなる人材を養成することを目的とするプログラムです。

2011年度からは、「DO-IT Japan」プログラムの一部として、ソフトバンクグループで教育事業を担うエデュアスとの共催で、タブレット端末を活用した小学生向けのプログラムを実施しています。



\ 参加者の声 /

武井 一星さん / 中学1年

DO-ITのプログラムに参加できて、とてもうれしいです。タブレット端末で、テキストを試みたら、これまでのテストよりもすごく楽しかったです。なぜなら、時間のかかる読みは読み上げ機能で、書きはタイピングを利用することができ、とても楽しかったからです。

大学の授業体験では、タブレットを持って授業を受けてみたら、ものすごく難しいはずの授業なのに、内容がよく理解できて驚きました。これからの学習や生活の中で苦手なことをサポートしてくれる道具として使っていきたいです。また来年がとても楽しみです。



武井 夏野さん(保護者)

読み書きがままならず、中学校でも悩むことが多くなってきました。これまで親としても、どこまでしてあげることが必要な支援なのか、判断が難しかったのですが、ICTの力を借りると、子どもの自立へのサポートも明確になりました。

「DO-ITのような学校があればいいのに」
息子が何度も口にしてきた言葉です。全ては始まったばかりですが、DO-ITの活動が息子にとって大きな一歩であることは、間違いありません。

詳しい情報はこちら



夢と志を育む

モバイル型遠隔情報保障システム*によって
聴覚障がいのある子どもたちの学習をサポート

モバイル型遠隔情報保障システム

ソフトバンクモバイルでは、東京都練馬区立開進第二中学校に携帯情報端末を貸し出し、モバイル型遠隔情報保障システム*による、聴覚障がいのある子どもたちの学習サポートを行っています。3年生の生徒は、「社会科の授業で、何ん自由なく多くの情報を受けられることができている。また、授業中に先生の説明している内容が聞き取れなかったときにも、スマートフォンに字幕が表示されるおかげで、級友に後れを取ることなく、勉強を進めることができている」と感

想を述べてくれました。2013年度は、7人の生徒が社会科の授業や学年の講演会、校外学習などで使用しました。



* 特定非営利活動法人長野サマライズ・センターが発起した事業(2008年度)から派生し、国立大学法人筑波技術大学、ソフトバンクモバイル、長野サマライズ・センター、国立大学法人群馬大学、東京大学先端科学技術研究センターおよび任意団体MCC Hubnetの共同研究グループで開発・実証実験を行ってきたシステムです。

環境

安全・安心なエネルギーを利用できる社会に貢献

自然エネルギーへの取り組み

SBエナジーは、大規模な太陽光発電(メガソーラー)や風力発電など、自然の力を利用して生み出される自然エネルギーの普及・拡大を目指し、全国の地方公共団体や民間所有の土地などを活用した自然エネルギー発電所の建設とその運営を推進しています。

また、太陽光発電所近隣の小学校を対象に、未来を担う子どもたちが主体的かつ創造的にエネルギーについて考える機会を提供する環境教育プログラム「未来×エネルギー プロジェクト」を、エデュアスおよび教育と探求社と協力して実施しています。SBエナジーは、子どもたちに誇れる豊かな社会の実現のため、自然エネルギーの普及を積極的に推進しています。



2012年7月1日に発電を開始した群馬県榛東村の太陽光発電所

自然エネルギー事業

全国にメガソーラー発電所、風力発電所を建設

2012年7月1日に稼働を開始した京都市および群馬県榛東村のメガソーラー発電所を皮切りに、2014年7月17日現在、全国で11カ所(13基)のメガソーラー発電所が稼働しています。さらに、今後全国6カ所以上で新たな自然エネルギー発電所を稼働させる準備を進めています。SBエナジーでは、今後も全国にメガソーラー発電所および風力発電所の建設を推進していきます。



初の風力発電所「ウインドファーム浜田」を島根県浜田市に建設

SBエナジーでは、三井物産、グリーンパワー・インベストメントとの共同事業として、島根県浜田市に風力発電所を建設します。SBエナジーとして初となるこの試みは、2015年度中の運転開始を目指し、2013年6月に建設が着工しました。1基当たり1,670kWの風力発電機を29基設置し、出力規模は約48MW、年間発電量は約8,500万kWhを見込んでいます。



SBエナジー初の風力発電所「ウインドファーム浜田」(完成予想図)

SBエナジーに関するより詳しい情報はこちら



環境

クリーン・安定的・安心・安全な 24時間365日稼働する分散型電源

国内初号機が福岡M-TOWERで運転開始

Bloom Energy Japanは、クリーンで高効率な業務用・産業用燃料電池発電システム「Bloomエナジーサーバー」の国内初号機を、福岡県福岡市内の「M-TOWER」に設置し、2013年11月25日より営業運転を開始しました。Bloomエナジーサーバーは米国Bloom Energy Corporation(所在地:米国カリフォルニア州サニーベール)が特許を取得している固体酸化燃料電池技術を用いたもので、日本での設置および運転開始はこれが初となります。今回「M-TOWER」に導入したBloomエナジーサーバーの出力規模は200kW。「M-TOWER」全



体の電力需要の約75%を賅うことができるため、Bloomエナジーサーバー設置により、安心・安全で安定的な電力供給が実現しました。

Bloomエナジーサーバーとは?

Bloomエナジーサーバーは燃料を燃やして発電する燃焼方式ではなく、固体酸化燃料電池(SOFC)の技術を用いて化学反応によるクリーンな発電方式で燃料(都市ガスやバイオガス)を60%以上*の発電効率で電気に変換します。燃焼を伴わない、クリーンで高効率な電源のため、米国では画期的な分散型ベース電源として

データセンターや工場、大規模商業施設、官公庁など、電力の持続的な供給が必要とされる施設での導入が進んでいます。

Bloomエナジーサーバー1基の発電能力は200kW。柔軟で拡張性のあるモジュール技術により、ニーズに合わせた発電容量での設置が可能です。* 交流送電端効率(LHV基準)

詳しい情報はこちら



環境

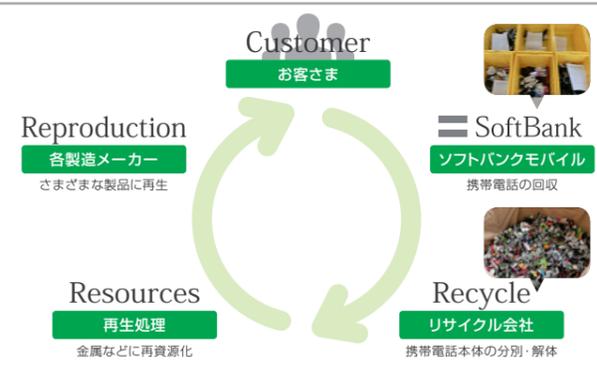
使用済携帯電話本体の回収が前年度比23%増

携帯電話のリサイクル・リユースへの取り組み

全国約2,600カ所にあるソフトバンクショップでは、携帯電話・PHSのリサイクル回収活動に取り組む「モバイル・リサイクル・ネットワーク(MRN)」の一員として、携帯電話事業者・メーカーを問わず、使用済みの携帯電話・PHSの本体、電池パック、充電器類、USIMカードなど

の回収を推進しています。回収の際には、お客さまに安心してリサイクルにご協力いただけるよう、個人情報保護に努め、携帯電話の本体を「ケータイパンチ」で物理的に破壊し、リサイクル処理しています。

リサイクル工場での解体・粉砕・溶解などの工程を経て抽出される希少金属は、電子機器などの部品の材料として再利用されています。より多くのお客さまにご協力いただくため、カタログやイベントなどでの周知にも取り組んでいます。なお、2013年度は使用済携帯電話本体を前年度比23%増の約109万台回収することができました。また、携帯電話のリサイクルに加え、ソフトバンクモバイルではリユース(下取り)も行っています。詳しくはお近くのソフトバンクショップにお問い合わせください。



詳しい情報はこちら



震災を教訓に、万が一に備えて

災害対策の取り組み

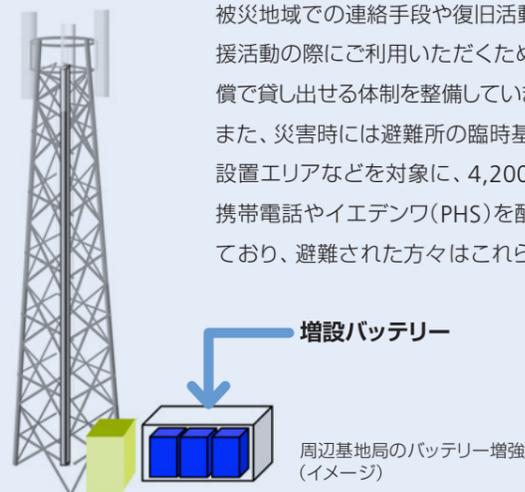
移動無線車・電源車の全車両に衛星携帯電話を搭載

災害に負けない、強固な通信ネットワークの構築

ソフトバンクモバイルは、NPO法人や公共団体への貸し出しを目的に、1,500台の衛星電話と携帯電話を全国の拠点に配備し、被災地域での連絡手段や復旧活動、救援活動の際にご利用いただくため、無償で貸し出せる体制を整備しています。また、災害時には避難所の臨時基地局設置エリアなどを対象に、4,200台の携帯電話やイエデンワ(PHS)を配備しており、避難された方々はこれらを連

絡手段として無料でご利用いただけます。

さらに、災害時の停電対策として、県庁や災害拠点病院などの重要拠点を中心に、周辺基地局のバッテリー増強、発電機の配備の強化を通して、停電時も24時間以上継続してサービスが提供できるような体制を整えています。停電により基地局の電源が途絶えても、全国に配備された移動電源車が迅速に電源供給を行います。



移動電源車



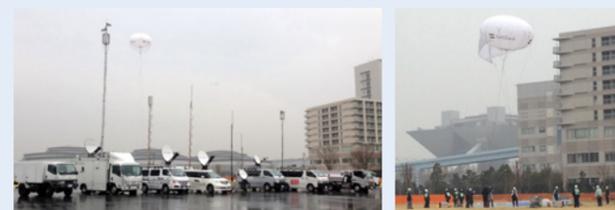
衛星携帯電話 (SoftBank 201TH)

ソフトバンクグループ合同災害対策訓練

気球基地局も登場 速やかな通信の復旧を目指して

ソフトバンクモバイル、イー・アクセス*、ウィルコム*の3社は、2014年2月、「ソフトバンクグループ 2013年度下期合同災害対策訓練」を実施しました。これまで、災害対策訓練を独自に実施してきましたが、このとき初めてソフトバンクグループとして合同で訓練を行いました。訓練は首都直下地震の発生を想定したもので、大規模災害時に通信エリアを応急復旧させる一連の動作を確認しました。ソフトバンクグループでは、移動基地局車を全国に配備しているほか、被害の甚大な地域をカバーできる基地局として気球基地局を開発。現在、全国に10カ所配備しています。

* 現 ワイモバイル



初の合同災害対策訓練時の様子

Yahoo! 防災速報

Yahoo! JAPANは、地震や津波、豪雨などの災害情報をアプリやメールで受け取れる無料サービス「Yahoo! 防災速報」を提供しています。最大3地点が登録でき、また位置情報を利用しているため、登録していない現在地でも受け取ることができます。緊急地震速報をはじめ、2013年8月からは自治体などから発令される「避難情報」、2014年2月からはアラートから発信される「国民保護情報」も受信可能となり、多様な災害に対応。自治体で行われる避難訓練などにも活用されています。



指定公共機関の指定

ソフトバンクモバイルとソフトバンクテレコムは2013年10月、災害対策基本法による指定公共機関に指定されました。また、ネットワークの復旧や自治体からの要請などに迅速に対応するため、緊急時でも道路を優先的に通れるよう緊急通行車両の事前届け出を実施するなど、社内体制の整備および関係官公庁との緊密な連携体制の保持に努めています。

障がいのある方の社会生活を支援する「アシストスマホ」提供開始

アシストスマホ

ソフトバンクモバイルは、障がいのある方の社会生活を支援するサービス「アシストスマホ」を2014年3月より提供開始しました。「アシストスマホ」は、「シンプルスマホ SoftBank 204SH」(シャープ製)に専用ソフトウェアをダウンロードし、「アシストスマホ」モードに切り替えることで利用できるサービスです。これは、主に知的障がいのある方の連絡や行動を支援するサービスとして、厚生労働省が実施する2013年度の「障害者自立支援機器等開発促進事業」に採択されています。また、2014年4月開催の「バリアフリー2014」に出展し、このサービスを紹介しました。

このサービスでは、保護者や支援者の方が端末の設定や後方支援

を行う専用サイトを通じて、位置情報の確認、利用者の習熟度に応じたホーム画面の変更や利用するアプリの選択、メールの定型文作成および徒歩ナビゲーションの目的地設定などが可能となります。申し込みは、ソフトバンクオンラインショップおよび非営利団体や特例子会社などの特定代理店を通じて受け付けています。なお、提供開始に合わせて、「アシストスマホ」相談ダイヤルを開設。ご利用を検討されているお客さまのご相談対応や、購入後の設定・使い方などのサポート、施設や企業での導入のご相談に対応しています。また、特定代理店で操作方法などをご案内するセミナーも今後、実施予定です。



「アシストスマホ*」の概要

シーンを選び、定型文をタッチするだけで簡単にメールが作成できる「アシストメール」や、ボタン一つで予定の完了を報告できる「スケジュール」、目的地の方向と距離を分かりやすく矢印で表示し、移動をアシストする「アシストナビ」など、「アシストスマホ」には利用者が自発的に連絡や行動が行えるよう豊富な機能が搭載されています。

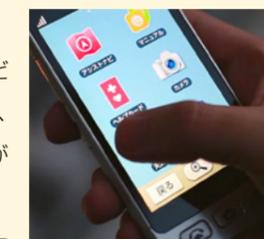
「みまもるフェンス」を通勤や通学時の到着地周辺エリアに設定すると、指定した時間に該当エリアに到着していない場合、あらかじめ登録したメールアドレスへお知らせします。また、利用者が

「迷っている」、「向かっている」など足取りから行動が推測できるので、状況に応じたサポートを行うことができます。

支援者向けの専用サイト「サポートWeb」からホームシートをカスタ

マイズすれば、初めて使う方にも簡単に覚えやすい操作画面を設定できます。位置情報も「サポートWeb」から利用可能です。

* 「アシストスマホ」のご利用料金は無料



アシストスマホ

アシストスマホに関するより詳しい情報はこちら



スペシャルオリンピックス日本を通じて知的障がいのあるアスリートにアシストスマホを貸し出し。使用した感想を専用サイトで報告

有森 裕子 氏

公益財団法人スペシャルオリンピックス日本 理事長



写真提供：スペシャルオリンピックス日本

知的障がいのある人たちは、それぞれの障がいによって必要なサポートが異なります。「アシストスマホ」はこうした事情を考慮し、利用者にとって使いやすいよう、その人に合った必要な機能やホーム画面をカスタマイズすることができ、知的障がいのある人たちにとっても、さらに生活が送りやすいよう考えられたサービスだと思えます。今後、通信サービスによって知的障がいのある人たちの生活環境がより良い方向に発展し、彼ら・彼女らが自立し、多くの人と出会い、社会性を広げ、新たにチャレンジする世界を見つけて活躍することを願っています。

多様なニーズ

誰とでもコミュニケーションがとれる社会を目指して

ゲームで学べる手話辞典

ソフトバンクモバイルは、「聴覚障がい者と聴者の隔たりのない、優しい社会を構築したい」との思いから、手話学習アプリ「ゲームで学べる手話辞典」を提供しています。これは従業員からアイデアを募集する「社会に貢献するビジネスアイデアコンテスト」で優秀賞に選定されたプロジェクトがサービス化されたものです。

このアプリは、実際の手話の動きを取り込んだ360度回転可能な3Dアニメーションで、約3,000語の手話を収録しており、さまざま

角度から細かい手の動きを確認することができます。また、魔法でモンスターを退治していくゲームを通して、楽しみながら手話を学ぶことができます。

手話利用者だけでなく、銀行や駅、販売ショップの窓口、学校の先生など、日常生活において聴覚障がい者に接する機会のある方にもご利用いただき、人々の手話に対する関心が高まる手助けになればと考えています。

動画サイトはこちら →



開発エピソード

開発にあたり、一つ一つの手話の動きや口の形、表情、解説文など全てをチェックし、細かい調整を行いました。

開発エピソード

カメラの視点がキャラクターの後ろに回ると、自動的にキャラクターの体が透けて、手の動きを自分の視点から確認できる機能は、いろいろな人から話を聞いたり、意見を出し合っているうちに考えついた機能です。



開発者インタビュー (ソフトバンクモバイル 商品企画統括部 禹 英哲、工藤 景司)

工藤: 開発にあたり、一つ一つの手話の動きや口の形、表情、解説文など、全てをチェックして調整を行いましたので、細かい手話の動きが再現できたと思います。また、プロジェクトを進めていく過程で、聴覚障がい者の方や、手話通訳士など普段から聴覚障がい者に接している方々とお話をしたところ、この企画のコンセプトに賛同してくださる方が多く、自分たちがやろうとしていることは意味があることなのだと実感することができました。

禹: 限られたスケジュールの中で開発を進めなければいけない状況で、全ての調整を行うことは思った以上に難しく、落としどころを見つけるのが大変でした。しかし苦勞の



(左から)禹、工藤

ウや技術、資産は、社会インフラに生かせると考えています。将来的に情報技術を活用して、われわれの思い描く「聴覚障がい者と聴者の隔たりのない、優しい社会」の構築につなげていきたいです。

アプリダウンロードはこちら



いがあり、手話の動きはもちろん、その他の部分にもこだわりを出せて、自信を持って世に出すことができました。今回のアプリ開発で培ったノウハウ

詳しい情報はこちら



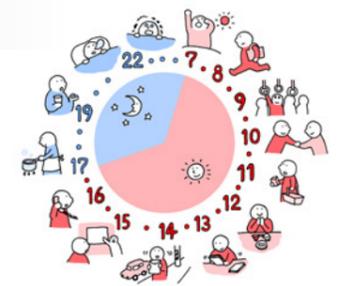
多様なニーズ

かんたん・便利なモバイル活用術

生活の「困った!」を解決

ソフトバンクモバイルは、携帯情報端末を活用することで、毎日の生活の不便さを解決し、障がいのある方をサポートすることを目指し、「生活の『困った!』を解決～かんたん・便利なモバイル活用術～」の

ウェブページを開発しています。このページでは、多くの人が毎日の生活で出会う「困った!」を解決する、スマートフォン・タブレット端末のかんたんな使い方のアイデアを提案しています。



CASE STUDY 「困った!」を解決する便利な使い方

【買い物】冷蔵庫に入るかな セールなどで食品を買うときに冷蔵庫に収納ができるか不安。そんなときには、こんな使い方が便利です。



安い! おいしそう! でも冷蔵庫に入るかな。

モバイルを使って解決!

冷蔵庫の写真撮って買い物に行けば、何があるのか、どのくらい空きがあるのかを把握して買い物ができます。

詳しい情報はこちら



多様なニーズ

障がいのある方々に携帯電話を手軽にご利用いただく

ろう者の言語「日本手話」の普及に取り組む

手話カウンター

ソフトバンク渋谷では、聴覚に障がいのあるお客さまが、安心して携帯電話に関する相談や契約などの手続きをしていただけるよう、「手話カウンター」を併設しています。当カウンターには手話スタッフが常駐しており、機種選びから操作方法、料金プランの説明、契約の手続きまで全て手話で対応しています。また、手話が分からないお客さまへは筆談での対応も可能です。2010年12月からは、全国17店舗のソフトバンクショップと当カウンターとをテレビ電話でつなぎ、手話スタッフがご案内する「手話サポートサービス」も開始しました。また、手話スタッフが携帯電話の安心・安全な使い方を手話と字幕で説明するDVDを作成し、ろう学校や関連団体に配布しています。



ソフトバンク手話教室

ソフトバンクモバイルは「日本手話」によるコミュニケーションを促進するため、「ソフトバンク手話教室」を開催しています。手話教室では、語学教育の理論と方法を身に付けた「ネイティブ・サイナー」(日本手話を母語とするろう者)の講師の下で、日本語とは異なる独自の言語体系を持つ「日本手話」を学ぶことができます。初めて手話を学習する方々を対象とするコースと、手話学習経験のある方々を対象とするコースの2種類があり、レベル別にクラスが設定されています。教室では音声や日本語に依存したテキストは一切使わず、手話学習者が自然に日本手話を習得できるよう、ネイティブ講師の指導による会話を中心に進めています。ソフトバンク手話教室は、これまでに延べ6,100人以上*の方に受講していただいています。* 2004年4月～2014年3月末までの延べ受講者数



詳しい情報はこちら



Topics

従業員の先駆的な社会貢献アイデアを発掘

社会に貢献するビジネスアイデアコンテスト

社会のニーズに応える先駆的なアイデアを発掘するとともに、従業員が改めて社会のニーズなどについて考える機会となるよう、ソフトバンクグループ社員から社会貢献に関連したビジネスアイデアを募り、選考を経たものを事業化するコンテストを2012年から開催しています。

これまでの実施概要	
【実施】	第1回: 2012年1月 第2回: 2012年7月 第3回: 2013年2月 第4回: 2014年4月
【対象】	ソフトバンクグループ企業
【応募総数】	約1,200件
【採用事例数】	8件



社員のアイデアから生まれたプロジェクト例

シニアクルー

シニアによる、シニアのためのスマホ教室

「シニアクルー」は、第2回ビジネスアイデアコンテストの優秀案件として、日本応用老年学会LLPと協力してプロジェクト化されました。このプロジェクトでは、シニアの生きがい発掘と、増加するシニアユーザーの顧客満足向上の両立を目指し、首都圏を中心に、ソフトバンクショップや公民館などでシニアクルーによるシニア向けのスマホ教室を実施しています。

2013年5月の開講から2013年度末までの間で、スマホ教室の参加者は230人を超え、多くのシニアの方々にスマホの楽しさを実感していただきました。ご参加いただいたお客さまからは、「同じ目線で教えてくれるので、分かりやすかった」「お茶会みたいで楽しかった!」など、大変ご好評をいただいています。

働く喜びを実感

シニアクルーによるスマホ教室開講以降、多くのお客さまにご参加いただき、スマホの楽しさや利便性を体験していただきました。スマホ教室の講師を担当するシニアクルーも、「人の役に立てうれしい」「不安もあったが、実際やってみるとすごく楽しい!」など、働く喜びを実感しているようです。



コンテスト応募概要

【発案者】

ソフトバンク・ペイメント・サービス 営業本部
高野真介

【内容】

シニアの再雇用による生きがいの創出

【きっかけ】

親にタブレット端末をプレゼントしたものの、ほとんど使っていない様子を見て、「どうすればシニア層に抵抗なく使ってもらえるのか?」を考えた。



【シニアクルー／シンプルスマホ教室】

2013年5月の発売以降、多くのシニアに支持されているスマートフォン「シンプルスマホ SoftBank 204SH」。この端末を活用して、シニア層のスマホデビューをサポートする、シニアクルー(60歳以上のスタッフ)によるスマホ教室を開催しています。



シンプルスマホ

Topics

家族が触れ合い、絆を深める機会を提供

ファミリーデー



(Yahoo! JAPANファミリーデー2013)

ソフトバンクグループ

従業員と家族の「絆」を深めることを目的に、家族や友人を職場に招待する「ファミリーデー」を開催しています。また、本社の社員食堂「Festa」では、「東京湾大華火祭」を観覧するイベントや料理教室など、家族や友人との触れ合いを支援する職場イベントを開催しています。加えて、ソフトバンクとソフトバンクグループ通信3社は、NPO法人C・C・C富良野自然塾の協力を得て、「親と子の健全な関係づくり」「環境・自然を真剣に考える」をテーマにしたオリジナルプログラムを夏休みの時期に毎年開催しています。

Yahoo! JAPAN

社員が生き生きと働ける組織風土づくりに取り組んでいます。日頃、従業員を支えてくれている家族の方を対象に、ヤフーが今後目指していく職場の雰囲気や文化、風土を感じていただく機会として、ファミリーデーを開催しています。ファミリーデーの目的は、「FUNを体感できる職場づくりの推進」です。親子で楽しめるブースのほか、社員が子どもたちからの質問に答える「お仕事インタビュー」や「スタンプラリー」など、ヤフーを知ってもらうためのイベントを数多く用意しています。

Topics

コミュニケーション・ソリューションで障がい者の社会参加を支援

アクセシビリティの向上へ スプリントの取り組み

スプリントは、障がいのある人々が直面するコミュニケーション上の障壁を、テクノロジーの力で大幅に軽減したいと考えています。各種取引先や携帯端末メーカーとの協力の下、アクセシビリティ(情報サービスの利用しやすさ)の向上につながるテクノロジーの創出に注力し、障がい者のクオリティ・オブ・ライフ(QOL)向上を支援しています。

全盲や弱視などの視覚障がい者の情報アクセス支援の一環として、スプリントは2013年9月、視覚障がいがあってもインターネットが利用できる、音声読み上げ機能を搭載した携帯端末「Kyocera Kona」

を米国で初めて発売しました。また、スマートフォンとしては米国で初めて、Google Inc.の視覚障がい者支援アプリケーション「TalkBack」や、初期設定方法を音声ガイダンスで案内するスプリント独自のセットアップ・ウィザード「Accessible Now」を初期搭載した「LG Optimus F3™」を発売しました。このほか、読字障がいのある学生向けアプリケーションを集めた「Accessible Education ID pack」を発売し、スマートフォンなどからオンライン教材を簡単に利用できるようにすることで、学習環境の改善を図っています。



ソフトバンクグループ

<http://www.softbank.jp/>

- TM and © 2014 Apple Inc. All rights reserved. Apple、iPhone、iPadは米国および他の国々で登録されたApple Inc.の商標です。iPhone商標は、アイホン株式会社のライセンスに基づき使用されています。App StoreはApple Inc.のサービスマークです。
- Google、Google Apps for Business、Google Play、Google Playロゴ、Androidは、Google Inc.の商標または登録商標です。

